

パモジヤ



2006年3月号

~未来のきりん探しの旅に出よう!~

今月のINDEX

- 1) 今月の1枚:キリマンジャロ
- 2) 援助のツボ:教育セクターレビュー
- 3) JICA 研修情報
- 4) 事務所からのお知らせ
- 5) 特集:新人研修記@KATC

1) 今月の1枚:キリマンジャロ



今月の1枚はアフリカ大陸で一番高い山、そしてスワヒリ語で、“輝く丘”という意味を持つ『キリマンジャロ』(標高:5,895m)です。因みにキリマンジャロ山には登山で目指す Kibo 峰(富士山に似た平らの頂上。写真左側)と Mawenzi 峰(ギザギザの方、写真の右側)という2つの峰があります。

2) 援助のツボ:教育セクターレビュー

五十嵐企画調査員

タンザニアの教育セクターでは、包括的な教育開発を目指し、これまで様々な取り組みが行われていますが、その一環として、先般、2月23日から25日までの2日半に亘って教育セクターレビューワークショップがダルエスサラーム郊外のホワイトサンズホテルで行われました。

今回のレビューワークショップは、第2次貧困削減戦略にあたる「成長と貧困削減のための国家戦略」(NSGRP)の効果的な実施に向けて、現在の教育セクター開発の拠りどころとなっている「教育セクター開発計画(ESDP)」(2001年策定)の進捗状況を振り返り、今後のESDPの方向性を検討し、包括的なセクター開発のための具体的な活動計画を提言することを目的としています。

教育セクターでは、これまで初等教育開発計画(PEDP)の年次レビューが開催されてきましたが、セクター全体を網羅する大掛かりなレビューは、今回が初めてです。レビューには、教育職業訓練省、科学技術高等教育省、地方自治庁などの関係省庁やこれらの教育セクター省庁の調整役である首相府に加え、保健省や地方政府改革プログラムの担当者、関係省庁傘下の教育機関、高等教育機関、地方政府、市民社会団体、教科書出版社などの民間セクター、そしてドナーなど、実に様々なレベルから120名余りの教育関係者が一同に集まりました。

ワークショップでは、就学前から高等教育までの各サブセクターの開発状況をまとめた「現状分析」、教育財政を分析する「公共財政支出レビュー」、教育開発状況のモニタリングシステムとして機能することが検討されている「教育セクター実績評価枠組み(PAF)」、効果的な教育開発のために関係者に求められる「政策対話」の4つを主要テーマとして取り上げ、まず各テーマの主な調査結果が発表され、引き続き、分科会で主要課題の洗い出しとその対応策について話し合われました。基礎教育(就学前、初中等、教師教育)、職業訓練教育、科学技術



高等教育の3つのグループに分かれて行われた現状分析の各分科会からは、多くの課題が挙げられています。中でも、就学前教育の戦略化、第2期 PEDP の戦略策定、深刻な教員および教室不足に直面する中等教育への対応、教員の質の確保のための施策、新教育課程導入に伴う教材開発の促進、ノンフォーマル教育や成人教育強化のための成人教育ユニットの部局への昇格、旧教育文化省に組み込まれた職業訓練サブセクターの位置づけの明確化、開発が著しく遅れる科学技術や高等教育サブセクターの開発計画策定、そして、HIV/AIDS やジェンダーなど横断的課題へのより一層の配慮などは、特に重要課題として確認されました。一方、公共財政レビュー、教育セクターPAF、政策対話の分科会では、マクロレベルを視野に入れた議論が中心となり、教育セクター全体の開発に必要なコスト算出と予算の優先づけ、サブセクターごとのデータ整備と教育セクター全体のモニタリングシステム構築のためのデータ調和化、そして、これらの課題を協議するために設立された各種既存フォーラムの活性化と連携の必要性などがそれぞれ指摘されました。ワークショップ最終日には、これらの課題改善に向けた具体的な活動案が話し合われ、主要課題と共に文書(Aide Memoire)にまとめられました。

今回の教育セクターレビューワークショップは、もともと昨年11月に開催される予定でしたが、総選挙の日程変更、キクウェテ新政権誕生後の省庁再編、これに伴う大臣や次官の異動などの影響を受け、これまで2度にわたって延期されており、一時はレビュー開催そのものが危ぶまれていました。このような状況下で、何はともあれ第1回目のセクターレビューが、これだけのスケールで開催されたこと自体、まずは評価されるべきでしょう。今回のレビューを振り返ってみると、各レベルの教育関係者の間で多様な課題が共通認識され、問題解決に向けて様々な議論ができたことが、最大の収穫であったと思います。ですが、その一方で、扱うテーマの広範囲に亘り、消化不良に終わってしまった部分が多かったことも否定できません。また、セクター全体の包括支援の名のもと、マクロレベルでの議論が先行し、現場に携わる参加者にとっては歯がゆいレビューであったかもしれません。さらに、レビュー開催にあたっては、特にドナー側から市民社会団体の積極的な参画が望まれていましたが、政府側から参加数や機関が制限されるなど、必ずしも自由な討議の場が保たれたとは言えません。パモジャ11月号の援助のツポで本田企画調査員から説明があったように、「満足のいく教育セクターレビュー」は、一般財政支援(GBS)の資金拠出条件のひとつになっており、年次セクターレビューは単に開催することが目的でなく、その内容も大いに問われることになります。その意味で、前述の課題は、今後のレビューの実施内容と形態、参加機関の選出などを検討する際の教訓として活かされるべきでしょう。

ワークショップで討議された主要課題や提言、活動計画については、教育セクター関係省庁の次官と各援助機関の責任者とで行われるハイレベル会議でさらに具体的な協議がなされ、2006年度以降の教育セクター開発の方向性について両者の合意を踏まえて Aide Memoire の最終版がまとめられることになっています。尚、ハイレベル会議には、キクウェテ大統領による開会の辞も検討されており、開催日程は大統領のスケジュールに従って近日中に決定される見込みです。

2) 耳より！ JICA 研修情報

現時点でタンザニア政府に候補者の募集をかけている、日本で行われる研修コースをリストアップしますので、カウンターパートに研修の機会を与える場になれば幸いです。なお、紙面の関係上、研修コース名と研修期間、応募締め切り日のみを記載しますので、詳細な情報が必要な方は事務所の加藤もしくはムソフエまでご連絡ください。以下のコース以外でも研修に関して質問がある場合には、いつでもどうぞ。なお、研修に応募するためには、履歴書、健康診断書およびカントリーレポートの作成、その後人事院のスタンプをもらう等多くの作業と時間が要求されます。ですからなるべく余裕を持って連絡をいただくと助かります。

なお、留意点は以下のとおりです。

- ・ どのコースも基本的にはタンザニア政府の人が対象です(民間会社で働く人は対象になりません。一部のコースは NGO からの参加も OK なものもあります)
- ・ どのコースにも応募にあたっての資格要件があります。この要件を満たさないと応募することはできません(特に年齢制限には要注意)。



- ・ どのコースも1名(もしくは2名)の枠に対し、4~5名程度の応募がありますので、応募をしたからといって、受かる保証はありませんので、ご注意を。

現在募集中のコース(コース名、研修期間、応募締め切り日の順)

- ・ Planning and management of the conservation of historic townscape, 7/31-9/16, 5/2
- ・ International maritime conventions and ship safety inspection II, 7/11-11/18, 4/25

帰国研修員同窓会、日本タンザニア文化交流会の開催について

加藤所員

帰国研修員同窓会(JATA)の活動の一環として、先月2月4日(土)にPolice Officers Messにて「帰国研修員と在留日本人との文化交流会」が開催されました。このようなタンザニア人と日本人との合同イベントの開催は今回が初の試みということもあり、JATA 執行委員会では準備に準備を重ね、そして迎えた当日、予期せぬ事態の続出(会場設定の遅れ、司会者、タンザニア側の出張料理人の遅刻等)にもなんとか耐え、予定されていたプログラム全てを無事遂行することができました。

本イベントの大きな目的として、タンザニア人と日本人との交流、更なる相互理解が掲げられており、これを成し遂げるためには双方からの多くの参加者が必要不可欠でしたが、当日は、タンザニアおよび日本人合計で予想を上回る130名ほどの参加者を集め、会は盛況なものとなりました。タンザニア帰国研修員は、研修期間中に、専門分野の研修だけではなく、多くの日本文化に触れる機会を得ますが、一旦帰国してしまうと、残念ながら日本を肌で感じる機会がほとんどありません。今回の交流会で久しぶりに口にした日本の料理は、研修期間中の思い出を呼び戻すことができ、また、良いリフレッシュの機会になったようです。

日本人参加者にとっても、タンザニア伝統料理、タンザニアの民族ダンス、タンザニアの子供たちの遊び等、タンザニアで生活しながらも、日頃なかなか体験することの出来ない文化と触れる良い機会になりました。

今後も様々な活動を企画し、皆様にもご案内させていただきますので、乞うご期待!

日本タンザニア文化交流(舞台裏編)

川村所員

今回のイベントの目玉の1つに双方の料理紹介があり、日本側の料理は大使公邸料理人の町井シェフの全面的な協力を得て、日本料理を8品(100人分を目安!)作っていただけることになりました。そのメニューというのは(1)寿司(日本料理といえばこれですね)、(2)竜田揚げ、(3)牛肉の照り焼き、(4)揚げだし茄子、(5)サワラの照り焼き、(6)だし巻き卵、(7)筑前煮、(8)アジの南蛮漬けと、書いているだけでお腹がすいてきました。

さて、前日の2月3日(金)、少しでも町井シェフの助けになればとJICAから川村、有光所員2名、協力隊員 千葉さん、永島さん、浅田さん、末木さん、関根さん、石井さんの計6名が大使公邸の厨房に集まりました。また、日本大使館からもお手伝いに来ていただきました。さて、私は過去の夏祭りで、私の切ったキャベツがあまりにも太く、某お客さんがそのキャベツの入ったお好み焼きを食べようとしたら、プラスチックのフォークが折れたという経歴を持っていますので、今回もあまり役には立たなかったような気もしますが、料理準備にあたっての舞台裏を皆様にお伝えします。厨房では町井シェフが全体を見ながら次から次へ的確に指示を出していきます。指示を出すだけではなく、最初にお手本を見せてくれるので、そのとおりマネしてやるのがポイントです。私達がまず指示されたのは、お寿司に使うエビがまっすぐゆであがるように、エビに竹串を指すこと。隊員の人たちと無言でひたすら竹串をさしました。その次は南蛮漬け用、玉ねぎのスライス。最初こそ緊張して、細く切っていたものの、途中からだんだんと乱雑になり「太くなっている」とシェフの鋭い指摘を受けることに。玉ねぎが終了したら、やはり南蛮漬け用、ニンジンの細切り。私が1本のニンジンと格闘している間に、隊員の皆さんは2本も終了させていました…最後の難関は、揚げだし茄子用のネギの小口切り。この間、新人見習い中の有光所員はひたすら茄子を切っていました。これで前日の準備は終了。

当日は協力隊員とともに朝8時半に大使公邸厨房に集合。私に与えられたタスクは揚げだし茄子用に茄子を揚げること。隊員と一緒に巨大なボール一杯にある茄子をひたすら揚げ続け、終了。その後は牛照り焼きの照りづけ(味付けはシェフによるもの)。有光所員とは言えば、ひたすらサワラを焼いていました。終了後、各自できあがった



料理をひざに抱えて、皆で会場に向かいました。

会場では町井シェフが握りずしとまき寿司のデモンストレーションを行って下さいました(写真参照)。刺身を作るための包丁さばきや、まき寿司が出来上がっていく様子に多くの人から感嘆の声があがっていました。ただ、タンザニアの人にはデモンストレーションという概念があまりないのか(日本人はデパートの地下とかで見慣れてますよね)、皆自分の食べたいネタを注文するコーナーに何故か途中から変わっていました。それでも町井シェフは笑顔でお寿司を握って下さいました。デモンストレーションコーナー以外でも、日本食はほぼ完食。最初に終了したのはやはり私達の予想どおり竜田揚げでした。最後になりましたが、全面的な協力をいただいた日本大使館、特に町井シェフ、そしてお手伝いしてくれた隊員の皆様、本当にありがとうございました。



3) 事務所からのお知らせ

「次長の目(jicho)」

高橋次長

JICHOとは、スワヒリ語で「目」の意味です。

年末、小雨季の雨量が少なく、食糧及び家庭用燃料の価格高騰、計画停電の実施など、我々の日常生活にもじわりと影響が及んでいます。これから迎える大雨季に収穫に必要な雨が降ることを願わずに入られません。

今月の一言は、『文武両道』です。

「文武両道」とは、文事と武事、勉強とスポーツ、それぞれ優れている、と解されていますが、先月紹介した「バカの壁」の中で養老氏は、「知ったことが、出力されないと意味がない、学んだことと行動とが互いに影響しあわなければならない、が本当の「文武両道」の意味ではないか」とされています。「文武両道」は、個人のレベルだけではなく、社会、国を単位としても、蓄積した知識(経済)を行動(スポーツ、芸術、技能)に活用することの重要性を示唆している、のではないのでしょうか。

さて、今年はオリンピックイヤーであり、トリノで冬季オリンピックが開催されました。

私にも、かつてはオリンピックを目指し(たわけではありませんが)、競技スキーに打ち込んでいた青春時代がありました。オリンピックに出場するだけでも大変な努力であり、選手の皆様には、尊敬と称賛しつつも、どうしてもメダルの数に目が移り、女子フィギアの金1個とは、カルガリ、リレハンメル、アルペールビルと、私のスキー人生と重なっていた当時と比べると日本人の活躍が著しく少なく、寂しい思いで見えています。しかし、入賞まで広げれば、スキー回転競技など、目覚ましい進歩も見られました。近隣の韓国、中国は好対照に存在感を高め、冬季オリンピックの常連、北欧、スイス、オーストリア、カナダなどは、従来どおりの活躍で、日本の存在だけが影を潜めてしまったように思えます。国家の勢いと言うものが比例していると考えるのは、つまらない憶測でしょうか。

インターネットに掲載される評論の中に、選手自身の能力開発もさることながら、日本では、育成する環境、支援策など、選手を取り巻く環境が著しく脆弱、との意見がありました。潤った経済大国でも、スポーツ、文化、技能などへの投資に振り向けることに十分な支持はなかったようです。そもそも、日本の社会が、日本人同士での近しい価値観の中に埋没し、向上心、競争心のよりどころを失い、スポ根などは論外で、小金を持ったまま迷走してしまっているようにも思えます。スノーボードの日本代表選手が、「メダルには興味がない、楽しければいいのです」と言ったコメントを思い出しました。緊張の裏返し強がりだったのかもしれませんが、勝負の世界でオリンピックと言う最高の舞台に立つ機会に挑み、世界一流のアスリートの中で、勝負を通じて学ぶ姿勢があっても良かったと思います。金があれば何でもできるとばかりに一世を風靡し、明快なビジョンを示すことなく、際限なく錬金術に暴走するヒル



ズ族の皆様同様、日本の社会は何か、組織と個人の価値観が見事に遊離し、歯車が狂い始めていると思わずにられません。

どんなに活躍している日本人がいても、マイナーな競技には、マスコミはほとんど関心を示しません。知名度の高いプロ野球選手のオフシーズンの契約更改、ゴルフコンペ、果てはサッカー選手の私生活のスクープが、知名度の低い競技で世界一となった日本人より優先して報道されている現実があります。

物事の価値観が専門性、効率性などを理由に細分化され、現代の日本では、領界を超えた価値観の共有、相互補完などができにくい社会が構成されています。時代は変わっても、それぞれの分野で、夢を持つ子供たちが育っている訳で、経済成長した国であれば、その夢を支える度量があるのだ、と胸を張れる国づくりに貢献してみたいものです。冬季オリンピックのように限定された地域でしか経験できない競技の世界で、日本の様な恵まれた環境がありながら、なぜ、十分な支援策に基づき競技者が活躍できないのか？大きな疑問です。

翻って、国際協力の世界ではどうでしょうか。

先日、協力隊員が活動する都市部の Youth Group の調査に同行しました。薬物、売春などに手を染めていた10、20代の若者同士のグループが手工芸品の製作を通じて、自立する機会を探っていました。彼らの活動は、自立にとどまらず、自らの体験を基盤に地域内で薬物、売春などに溺れる若者を対象にHIV/AIDS防止のためのワークショップを開いたり、社会貢献ともいえる立派な活動を実践しています。自分たちができることを、明快なビジョンとして説明してくれました。協力隊員は、Youth Group の調査、Youth Group 同士での経験の共有を働きかけたり、彼らの活動をヒアリングし、将来への希望をまとめたデータベースを作成し、区役所に報告し、青年たちへの職業訓練のニーズを区役所の計画に反映するなどの架け橋の役割を果たしています。Youth Group、協力隊員、区役所との間で、「知ったことが出力される、学んだことと行動とが互いに影響しあう」、「文武両道」サイクルが生まれています。

これを大きく考えれば、村落の貧困を知り、国家の政策に反映する、両輪が必要なことは自明です。

中央政府では、天下国家を語り、マクロ経済指標の改善のための政策を策定しておりますが、我々、外国からの部外者は、中央政府との対話を重視しつつも、我々の知識に欠落している貧困の現場で起きている現状も学び、必要に応じて中央政府にフィードバックする架け橋としての役割もまた重要と、再認識しました。中央、地方政府ともに、限られた人材で、現場で起きている出来事を確認する機会が少なく、憂慮すべき課題だと思います。ここでもやはり、「現場、三現主義」がまた、出てきます。

タンザニアを取り巻く援助の環境は急速に変化しています。「援助協調」という言葉を聞いたことがありますか。これまでのパモジャでも何度も掲載されていますが、「JICHOの目」でも噛み砕いてみました。(全くの私見です)

「援助協調」は、「援助強調」でも「援助凶兆」でも「援助狭長」でもありません。これまで、受益国の開発計画に基づき、各先進国ドナー、国際機関が独自にそれぞれのやり方で、地域を限定し、政府内の特定部局を対象に目標を設定し、プロジェクトとして事業を進めてきました。その結果、良い結果が出ても国全体に広がることは困難であったこと、および受益国の政府関係者は各ドナーからのプロジェクトの調整に追われ、自国が自発的に実行する開発計画、本来業務に従事することが困難であった、との反省に立ち、受益国の開発計画に対して、各ドナーは資金提供し、共通の手続きに基づき、対象国が事業を主体的に行うことを目指しています。全くその通りで、全面支持です。

さて、援助協調は貧困削減に貢献できるのか！ 私なりに考えたことは次のとおりです。



貧困とは、人間の体に例えると、怪我や病気、援助は治療と例えられるのではないのでしょうか。(ドナー先進国が医者というのはおこがましいのですが)それぞれの部位に専門医が治療してきたやり方(技術協力)を改め、貧困とは、経済的に自立できない、そもそも食糧不足、栄養失調であったことが原因なので、共通の「お金 = 経済」という食糧で支援しようといった考えに、移行していることが援助協調の場で最近特に議論されている、財政支援につながると思います。

食糧(資金協力)が十分になり、血管を通じて末端まで届いても(地方行政改革)、筋力、柔軟性、持久力が伴わなければ(人材育成)、健康(経済成長)につながらないと思います。中央政府に対する一般財政支援と実際に行動する開発計画が文武両道として機能することが大事です。

現在の潮流は、援助協調することが手段ではなく、目的となっている志向が見られ、将来を予測すると、経済的に潤っても、技術を持たず、行動できない『肥満』が蔓延するのではないかと心配します。

一方で、旧来の事業手法に固執することもまた、健全な発想ではないことも確かであり、援助協調推進派のレッスンを見守りながら、近い将来訪れる肥満体のシェイプアップのために対応できる事業を実施するために必要な備えを準備することが必要だと考えます。

これは全くの私個人の視点ですので、JICA がこのように考えているとは思わないで下さい。

貧困には様々な背景に基づく理由があり、経済モデルでは説明できないことは、歴史が証明しています。

人材育成をモットーとする JICA では、援助協調の席に加わり、自らの援助メカニズムを謙虚に改善し、過去の実績に固執することなく、任国人材の育成に、垂直的にも水平的にも多様性のベクトルを拡げ、「愚直」に現場と中央の架け橋として、取り組む姿勢も必要だと思います。

文事と武事、政策と現場、国策・経済とスポーツ選手の育成、無理なまとめですが、両輪となって機能できるようなバランスを持って、取り組んでみたいものです。

ご意見等、ぜひお聞かせください。メールアドレス;Takahashi.Naoki@jica.go.jp

今月の危機管理

老川所員

<タンザニアも銃社会?? 気を引き締めていきましょう>

安全対策担当として、赴任された専門家・協力隊員の方に安全ブリーフィングをする機会が良くあります。常に新しい情報を含んだ上でみなさんにブリーフィングをしようと試みていますが、最近特に力を込めて説明することがあります。それは「銃犯罪の増加」です。

特に昨年末から大きな銃犯罪が頻発しており、新聞紙上でも大きく取り上げられております。前号のパモジャでも触れましたが、この流れはキクウエテ政権発足後も続いており、1月にはダレサラムのカリアコーの宝石店、ウブンゴの銀行などで銃を用いた強盗が発生し、その後現在に至るまでアルーシャ、タンガなどの都市でも銃器強盗が続発しております。

これらの事件の多くは、銀行、換金所、宝石店等の店舗を狙ったものと車両強盗に大別されます。いずれにしても、まずは犯罪に巻き込まれないための予防措置が肝心です。銀行などに立ち寄り際には、周囲に不振な人物はいないかを十分に確認するとともに、必要以上に長居しない等の注意が必要ですし、車を運転する場合は、夜間の人気のない場所は避ける、なるべく一時停止しないで済むルートを選ぶなどの工夫をするようにしてください。ただし、残念ながらいくら注意を払っても銃器犯罪に巻き込まれるリスクはあり、日ごろから万一を想定したシミュレーションしておくことが大事だと思います。物騒な話なので、あまり日ごろから想像したくはないかも知れませんが、そうは言われていられないと言うのが昨今のタンザニアの状況だと思います。大原則としては、銀行強盗や車両強盗などに遭遇してしまった場合は、完全に無抵抗に徹するという事です。犯人から怪しまれるような行動は取らないようにし、間違っても犯人に抵抗するようなことは避ける。昨年ドドマであった携帯電話ショップへの強盗事件では、



犯人グループの一人を取り押さえにかかった男性が、別の犯人から無残にも銃殺されるという事件がありました。車両強盗について言えば、シートベルトを外そうとする行為やバッグを取ろうとする行為は、犯人側から「こいつも銃を持っていてこちらを撃ってくるのでは!？」と勘違いさせる可能性がありますので、まずは両手を挙げて犯人側の指示にしたがって動く必要があります(しかしながら、完全に無抵抗に徹したにも関わらず、残酷な犯人グループに撃たれてしまったというケースもあります)。

パーフェクトな予防策・対応策はありませんが、まずは銃犯罪の恐ろしさとそれが身近にあることをしっかりと認識することが、予防の第一歩だと思います。

<タンザニア版110番>

日本では警察への緊急連絡は「110番」ですが、タンザニアでは「112番」となっています。ところが、この112番、評判が悪いのです。というのは、『いくらかけても出てくれない』ことがよくあるとのこと。日本では考えられませんが、こちらでは珍しくないようです。実際に、1月にダレサラムのクロックタワー付近で起きた強盗事件では、犯人グループの犯行中に警察に通報した人がいたにも関わらず、警察がその電話に出なかったという事態があり、警察側の対応の悪さが指摘されました。

これを受けて警察は、「112番」以外の新たな緊急連絡先を設定し、発表しました。これで100%状況が改善されるかは分かりませんが、皆さんも万々に備えて、携帯電話に登録されることをお勧めいたします。

【携帯電話】 0741-323999, 0741-328999

【固定電話】 (地域局番)-2194401, 2194402, 2138177

<2月の犯罪被害報告>

日時	場所	被害内容	教訓
1/21 午前 11時	モシ	大きな登山バッグを抱えてダラダラに乗車していたが、死角になっている箇所ではバッグがナイフで裂かれ、ダラダラを降りてから気がつくと、中に入れてあったポーチ(財布、デジカメ等あり)が盗まれていた。	人ごみのなかでは荷物に細心の注意を払うこと。特に大きな荷物を持つ場合は、死角を作らないように手や目線で確認するようにする。

協力隊関連 Peace Corps Mr. Proden が当事務所を訪問



2月24日(金)に Mr. P. Proden (Associate Director for Education, Peace Corps)が当事務所を訪れ、お互いのボランティア事業について所長、次長を始め協力隊調整員と率直に意見交換を行いました。因みに今回の会議から得られた Peace Corps に係る基本情報としては、

- ・1961年から開始された事業。
- ・年齢制限はないものの、22歳から28歳が多い。職務経験が要求され、

契約期間は27ヶ月間が一般的。また応募にあたってはアメリカ国籍が必要。

- ・現在の Peace Corps の生活費は 180,000 シリング/月。
- ・2002年のブッシュ元大統領のコミットにより、全世界的に2008年までに人数を倍増させる予定であり、タンザニアで言うと2002年には147人だったのが、2003年には160人まで増えた。しかし経済的な要因特に昨年アメリカを襲ったハリケーンカリーナの影響で、人数が減り、今は130-140人の間で推移している。倍増させるのはもう少し時間がかかりそう。
- ・JICAで言う協力隊調整員に当たる人はタンザニアオフィスに30人いる。
- ・派遣された後、地方で10週間の研修を受ける(近年はキロサにて実施。ホームステイも行う。スワヒリ語の習得およびタンザニア文化を身を持って体験することが目的)
- ・派遣の重点分野としてはHIV/AIDS, 環境、教育である。



その他に、緊急時の連絡手段や、中学校での語学(授業は英語でやるべきであるが、生徒がまだ英語による授業になれていないこと、結果として、英語とスワヒリ語のミックスで授業をやらなくてはならないこと)、隊員の安全対策(特に住居)、派遣期間中のリフレッシュコースの充実等が共通して抱える問題・課題として挙げられました。また、1箇所にとどこまで協力を続けるか、引き上げ時期についても議論となりました。これからも積極的に情報交換を行っていく予定です。

JICA関係者 クワヘリ

藤原邦夫専門家(指導科目:村落給水/地下水開発、配属先:水省地方給水局/水資源局、派遣期間:2005年4月15日-2006年3月5日)

前回の長期専門家業務を健康上の理由により途中で投げ出す結果となったことは非常に残念でした。今回図らずもその引継ぎの任に当たることが出来たのは幸運でしたが、10ヵ月半という期間は文字通りの短期で、あっという間に過ぎ去ってしまいました。これといった目に見える成果を残さないままに離任するのは後ろ髪を引かれる想いです。また、前回仕込んだ開発調査案件2件が現在進行中で、この成り行きを見届けずに去るのが敵前逃亡のような気がしないでもないです。しかし、今回の短専業務をもって私の25年に亙った海外コンサル業務の幕引きと決めたのですが、締めくくりの業務を私の経験国26か国中最長の滞在(10回、延べ2.8年)となったタンザニアで大変楽しく過ごさせていただいたことをありがたいことだと思っています。帰国後は念願だった弓道三昧の日々を過ごすことになり、表面上ご縁が切れることとなりますが、多くのご支援をいただいたタンザニア事務所の方々、何かと頼りにしてくれた水省C/Pの人々のことは生涯忘れることがないでしょう。皆様本当にありがとうございました。引き続きこの国の自立発展に向けてさまざまな分野で活躍されている方々の、健康に留意されてのご奮闘と、JICA タンザニア事務所のますますのご発展をお祈り申し上げます。

4) 特集:新人研修記@KATC2 プロジェクト

有光所員

現在JICAタンザニア事務所にて新人研修中の私は、2月6日から3月4日までの1ヶ月間、キリマンジャロ州モシを拠点とするキリマンジャロ農業技術者訓練センター計画フェーズ(KATC)で、プロジェクト調整員業務の補佐として研修をしています。

KATCは、タンザニア国内6ヶ所のかんがい事業地(モデルサイト)を対象とする研修を通じ、かんがい稲作技術の普及を図り、収量と収益性を図るプロジェクトです。KATCには現在、太田(チーフアドバイザー)、大原(営農・稲作)、井上(水管理)、相川(普及・農民研修)および浅井(業務調整)専門家諸氏、計5名があり、カウンターパートであるKATCのタンザニア人スタッフと共に研修の開発、実施に取り組んでいます。

このプロジェクトでは早魃のため現地での実地研修が行えなかったところを除く5箇所のサイトで研修の成果が稲の収量の増加といった目に見える形で生まれています。

この経験を踏まえて、KATCではこの成果をタンザニア全土に広げられるよう、質を保持しつつ研修にかかるコストを削減した研修の軽量パッケージ(応用版研修と呼んでいます)を開発しています。この“安くてうまい”応用版研修は、すでに研修内容を練り終え、実際に農村で現地研修を行う段階にあります。

私の滞在中にもレムクナという村(モシからタンガ方面に車で約2時間ほど走ったところ)での現地研修が丁度行われ、ジェンダーのセッションと田植えのセッションをそれぞれ1日ずつ見せていただくことが出来ました。

(因みにレムクナ村での研修の様子はKATCホームページのトピックスコーナー <http://members3.tsukaeru.net/katc2/topic/topic10.html>にも報告されています。)

「伝える」ということ

実際にプロジェクトの活動を見て感じた1番のことは、一つの技術を、文化や技術レベルの違う人に伝えるという行いは、現地の事情を考慮しながら、忍耐強く、そして丁寧にやる必要があるということでした。

KATCのスタッフが研修を進める様子や、それを見守り、時にアドバイスをする日本人専門家の方の様子を見てい



ると、農民に稲作技術を伝えるという作業がどのような工夫のもとに組み立てられているのか、プロジェクトが稲作の収量増加というゴールに辿り着くために、時間と工夫を凝らして築き上げてきた道すじを垣間見ることが出来たように思います。

KATC の活動には2つの“伝える”という作業があります。一つは日本人専門家がKATCスタッフに研修技術を伝えるという作業。もう一つはKATCスタッフが農民に稲作技術を伝えるという作業。その二つの“伝える”という作業に共通するのは、相手に学ぼうという意欲がなければ、その伝えたいことはその人に身につくことはない、ということです。

相川専門家曰く、「学ぼうという意欲を掻き立てる動機には色々な類があり、例えば、“研修に行けばお金がもらえる”といった外側からもたらされる動機もあれば、“研修内容そのものが役に立つから学びたい”という、内側から生まれてくる動機まで様々。」「まずは研修に来てもらうことが必要だが、大切なのはその先。学ぶ内容自体に関心を抱いてもらい、学ぶことに対して内側からの動機を持ってもらわなければ、研修で伝える内容は持続性を持たないまま消えてしまう。」「外部者である我々は、内側からの動機がわき起こる様な工夫をする必要がある。」

こうした理由から、KATC の研修コースには、農民の学びへの意欲、動機を刺激する仕掛けがたくさん組み込まれています。

例えば、

- ▶ 研修の対象者である中核農民や中間農民を、地域のステークホルダーの全てが納得する基準に基づき“選定する”という作業。“選定された”農民は自信を持ち、同時に研修に対する責任感が生まれます。
- ▶ 研修の中で扱うジェンダーのセッション。農作業などの仕事を男女でどう分担すれば仕事量が減るのかなど、新しい夫婦の役割分担を説くこのセッションは日常生活にまで影響を及ぼすので、農民の興味も尽きません。
- ▶ 稲作研修の技術レベル。農民がすぐに実践できるよう、研修内容は基本的に忠実な技術レベルに抑えます。
- ▶ シンプル且つ安価に農民が作れる農機具の紹介。仕事量の減少につながる農機具に関心を持たない農民はまずいません。
- ▶ モデル水田の設置。KATCの技術効果の大きさを日々実感できるよう、モデルサイトにはモデル水田を設けます。

・・・などなど。

あらゆるところにこうした一つ一つの工夫を仕掛け、そして丁寧に実施していくことで、KATCの提供する稲作技術が農民に受け入れられ、実践され、さらには稲収量の大幅増というゴールにつながったのだと実感しました。

これらのポイントはKATCスタッフともよく共有されているようです。研修の講師を担当するスタッフは研修中も、受講者である農民が研修を楽しむことをとても重視しています。例えば、田植え研修のように実践的な技術を伝える際には、まず自分が手本を示し、その手本をもとにその場で農民に実践させることによって、自分で出来るという自信を植え付けていました。伝えている技術が本当に農民に受け入れられているか、それが役に立っているか、その都



度確認しながら研修を進めていく様子は非常に頼もしいものでした。そんな彼らの堂々とした“先生ぶり”は、日本人専門家の方々からKATCスタッフに長い時間とたくさんの工夫を凝らして技術を伝えてきたその歴史と、その技術がこうして彼らの中に蓄積されているという成果を私に感じさせました。

レムクナ村での現地研修の見学を含め、今回こうしてKATC で過ごさせていただいている1ヶ月という時間は、JICA事業として技術移転がどのように進められているのか、また、そもそも技術移転、人材育成とは何なのか、など、たくさんのことを吸収させていただく大変貴重な時間となっています。



今回こうして私を受け入れえくださっているKATC の専門家の皆様、暖かいご指導を本当にありがとうございます。

写真説明: 田植え研修の日には農民の皆さんと一緒に田んぼに入り、人生で初めての田植えを体験しました。

パモジャでは引き続き皆様からのご意見・ご感想をお待ちしています。特に特集ページでは援助分野に関係なく、タンザニアのさまざまな分野における一般的な概要をご紹介できればと思っています。皆様の役に立つ、楽しいニュースレターにしたいと思っておりますので、取り上げてほしい特集・リクエスト、投稿など、下記のメールアドレス宛、あるいは直接ご連絡ください。なお、リクエストの要望をいただいておりますが、執筆者の都合等で取り上げられていない方にはお詫びいたします。申し訳ありません。

なお、パモジャ(Pamoja)とはスワヒリ語で「一緒に(together)」という意味です。

Email address: Arimitsu.Sachiko@jica.go.jp, Kawamura.Yasuyo@jica.go.jp

